
盗まれた花嫁

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

盗まれた花嫁

【Nコード】

N5403S

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

イギリスの国教会の大聖堂にして聖パウロに捧げたとされているセント・ポール大聖堂。

そこで一組の男女が式を挙げようとしていた。

花婿は意気揚々としているが、花嫁は対照的に暗く望んでいない結婚に思える。

そんな花嫁の気持ちを尻目にセント・ポール大聖堂は物々しい警備体制を敷いていた。

先日、このような手紙が届けられたからだ。

『セント・ポール大聖堂で執り行われる式の花嫁を頂きに参上する』
単刀直入に書かれた内容の手紙で、最初こそ悪戯と思っていたがその筋の線で浮き彫りとなった一人の男。

その男に盗めない物は無い、とさえ言われている。

その事もあり物々しい警備体制が敷かれているのだ。

だが、彼は盗むと決めたら必ず盗む男。

そして花嫁もまたその男に盗まれない、と思っている。

(前書き)

痛い！痛い！痛い！

す、すいません！！

本当にすいません！！

で、でも、やってみたかったです！！

二次創作という物を！？

書きたかったです！

ルパン三世の話を。

私が好きなハリマオの財宝を追え！！のヒロインとルパンをくっ付けたかったです！！

イギリスの由緒ある教会セント・ポール大聖堂の周りを物々しい警察官が取り囲んでいた。

手には高性能なH & amp; K MP5サブマシンガンまで携えており更には私服警官の姿までチラホラと見える。

銃器対策班以外は銃を持たない程、銃規制が厳しいイギリスにしては珍しい。

それもその筈だ。

何せここでは英国王子の結婚式が行われるのだから。

花嫁は元英国諜報部員で007のモデルにもなった男の孫娘だ。

名前はローマ神話に出てくる狩猟の神から取られた名前だ。

ロンドンの大学で助教授を務める彼女だが、シーズンの時にパーティーで出会った王太子の眼に止まり熱いプロポーズを受けた。

彼女の両親はそれを両手を上げて喜んだ。

一国の王子から求婚されたのだから親として喜ばずにはいられないだろう。

しかし、肝心の花嫁は浮かない顔をしていた。

彼女に結婚する気が無かったからだ。

だが、王子のプロポーズを断る訳にもいかない。

何より周りが結婚して当たり前という雰囲気を出していたから出来なかった。

純白の花嫁衣装に身を包んだ花嫁は浮かない顔のまま、姿見の前に立っていた。

手には一枚の手紙がある。

その手紙を持ち上げた。

『セント・ポール大聖堂で祝福を受ける6月の花嫁を頂きに参上する』

花嫁は手紙を見て溜め息を吐いた。

これを送られたのは式が決まった時だった。

どうやってか知らないが、それを日本の刑事が知り王太子に警備を志願した。

だが、王太子はスコットランドヤードが居れば十分と言い切って警部を追い出した。

その警部は現在スコットランドヤードの刑務所に入れている。

そうしないと、変な真似をするかららしい。

まあ、彼女にとっては関係の無い話だが、こんな事を考えないとや
っていけないのだ。

「盗むなら早く来なさいよ……………」

もう直ぐ式を始める。

そうしたらもう駄目だ。

だから、速く盗んで欲しい。

だが、もう時間が無い。

コンコン、とドアを叩かれる音を耳にした。

「花嫁様、お時間です」

「…………今、行きます」

もう駄目だ、と花嫁は思った。

ドアを開けて女性に案内されるままに大聖堂へと向かった。

大聖堂に入るとパイプオルガンの音色が鳴り響き、参列者が一堂に
花嫁を見た。

父親に手を掴まれて歩き出した。

目の前には巨大なイエス・キリストの像と純白の衣装に身を包んだ

花婿の姿が見えた。

そしてあつという間に神父の前まで来ていた。

まだ心の準備が出来ていないのに何時の間にか誓いの言葉まで来ている。

「では、これより誓いの言葉に入る」

神父は聖書を広げて言葉を言い始めた。

「汝、如何なる時も妻となる女を見捨てずに共に生きる事を誓うか？」

「はい。誓います」

「汝、如何なる時も夫となる男を見捨てずに共に生きると誓うか？」

「・・・・・・・・・・」

花嫁は黙った。

否、言えなかった。

好きでもない男と結婚などしたくない。

そして言いたくない。

誓いの言葉など・・・・・・・・・・

言うとしたら・・・・・・

「何をしているんだい？早く言いなさい」

花婿が急かした。

それでも花嫁は口を貝のように閉ざした。

それに参列者は花嫁の沈黙にどよめいた。

「何故、言わないんだ？」

花婿の声が苛立って来ている。

「貴方が好きじゃないからよ！！」

花嫁はついに口を思っていた事を言った。

「私が好きなのはサル顔でHな事しか頭がない・・・だけど本当に優しい紳士よ！！」

何とも酷い言われ方をした相手だ。

花婿は当然の言葉に啞然としたが、直ぐに怒りを露わした。

そして花嫁の手を強引に掴んだ。

「痛ッ」

花嫁の苦言を無視し強引に指環を嵌めようとした。

「これを嵌めれば夫婦だ!!」

「離してっ。助けて、……!!」

花嫁は予告状を差し出した男の名を叫んだ。

「はい。呼ばれてただ今、参上しましたとね!!」

豪勢なステンドグラスを割って一人の男が現れた。

赤いジャケットに黄色いネクタイをした男で年齢は30代くらいだ。

揉み上げの髪型に猿顔で決して美男子とは言えない。

だが、愛嬌があり何処か魅力的だ。

「……」

花嫁は男の名を呼んだ。

「やつほー。俺の女神ちゃん。綺麗な衣裳だね」

花嫁の衣裳を褒めた猿顔の男は花婿を睨んだ。

「てめえ。紳士のくせに女に乱暴するんじゃないよ」

「だ、黙れっ。不埒なコソ泥風情が!!」

「おめえ何ぞに馬鹿にされる筋合いは無いっての!!」

男は花婿の顔に靴底を押し付けて蹴り飛ばした。

まるで、俺の花嫁に汚い手で触るんじゃないかと言ったかのように。

王太子は鼻血を出して盛大に後ろに倒れた。

それを見た参列者たちの悲鳴が広がる。

花婿を倒すと花嫁を左手で自身の胸に抱いた。

花嫁は男の胸に顔を埋めた。

そして首に両手を巻き付けて、離れないようにした。

「じゃあ、予告通り花嫁は頂くぜ」

右手を掲げてワイヤーを飛ばした。

ワイヤーは天井に刺さり、一気に釣り上がった。

二人は天井に移動した。

窓ガラスを割り、去って行く。

一同は啞然としていたが直ぐに慌てふためいた。

鼻血を出して倒れた花婿はその日の新聞の一面を飾った。

『英国王子、鼻血を出した上に花嫁を強奪される。しかも、結婚は

無理やり?』

と書かれて世界中の笑い種とされた。

場所は変わってフランスのとある片田舎。

そこに小さな教会がある。

その教会では小さな式が執り行われていた。

参列者は顎鬚が特徴の男と着物姿の男だけで、他には誰も居ない。

二人は恐らく花婿の知り合いだろうが、花嫁の家族や知り合いは誰も居ない。

何とも寂しい式だ。

だが、そんな事を二人は気にしていなかった。

寧ろ下手に呼べば事が荒立てる事になるのは明白。

それを考えて花嫁には悪いと思ったが、二人で出席したのだ。

花嫁と花婿は十字架が掲げられた前で並んで立っていた。

そこへ聖書を持った神父が現れた。

神父は花嫁姿の女性と白いタキシード姿の男の間に立つと誓いの言葉の口にした。

「汝等、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

慣れた口調ながらも重い色を込めて神父は訊ねた。

「はい、誓います」

花嫁はベール越しに小さな声で、しかしはっきりと頷いた。

次に神父は花婿に視線を向けた。

花婿もまた頷いた。

「ああ。誓うぜ。生涯を掛けて真心を尽くし、護り抜くとな」

はっきりと断言して見せる花婿。

それを神父は円満な顔で聞いて頷いてみせた。

「では、指輪の交換を」

神父は銀色の指環を二人に差し出した。

何の変哲もない指輪だが、二人にとっては……正確に言えば花嫁にとってはどんな高価な指輪より価値のある指輪だ。

二人は向き合い互いの指に指輪を嵌めた。

「では、最後に誓いのキスを」

花婿が花嫁のベールを優しい手つきで上げた。

ベールから水色の瞳が現れて男の黒い瞳を射抜いた。

「愛しているわ・・・ルパン」

花嫁が初めて男の名を口にした。

「俺もさ・・・ダイアナ」

花婿もまた花嫁の名を口にした。

そして静かに口付けを合わせる二人。

それを見て神父と参列者の二人は、にんまりと笑い合った。

誓いのキスを終えた二人は赤いバージンロードを歩き始める。

ドアを開けると村人たちが花を空に投げては二人を祝福した。

「さあて、ダイアナ。ブーケを投げなよ」

花婿・・・ルパンは妻となったダイアナを横抱きにして言った。

俗に言うお姫様抱っこという形にされたダイアナは僅かに顔を赤くしながらもブーケを高く投げた。

後日、暗黒街の新聞紙に大きな見出しが載せられた。

『世紀の大泥棒ルパン三世、英国諜報部員の孫娘と電撃結婚!!』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5403s/>

盗まれた花嫁

2011年10月3日22時30分発行